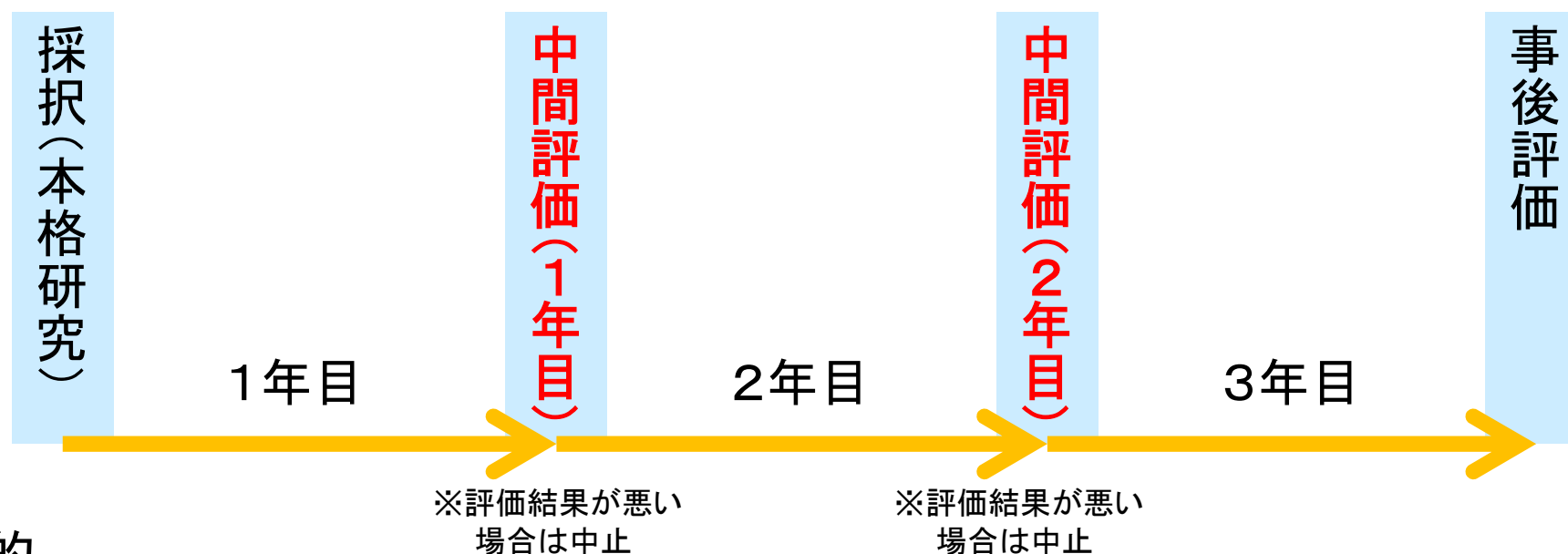


令和7年度継続課題の中間評価の実施方針案について （概要）

本格研究の中間評価の位置付け及び目的

■ 位置付け

本格研究の採択～評価の流れ(研究期間3年の場合)



■ 目的

中間評価(本格研究)

研究の見通しや進捗を評価し、以下を図る。

- ・ 研究の適切な実施
- ・ 次年度以降の研究費の適正化

中間評価の手順(スケジュール)(案)

⑤ 研究状況報告書の作成 (9月上旬～12月下旬)



① 書類の事前査読(書面による評価) (～1月中旬頃)

- ・ 事前査読を実施(事前査読結果の提出は任意)
- ・ 委員からの質問・コメントがある場合は、研究代表者へ事前に連絡。



② 研究評価会の開催(ヒアリングによる評価) (1月下旬～2月上旬頃)

- ・ 分科会毎に研究評価会を開催(1課題あたりの時間は、報告10分、質疑10分、2～3時間程度)
- ・ 報告・質疑を踏まえ、分科会各委員は各課題の中間評価シートを作成。
- ・ 各委員からの中間評価シートを基に、中間評価(案)を作成するための審議を実施。



③ 中間評価(案)の作成 (～2月下旬頃)

研究評価会后、分科会長は中間評価(案)を作成。



④ 中間評価の決定 (～3月上旬頃)

新道路技術会議において中間評価(案)を審議し、合議により中間評価を決定。



⑤ 中間評価結果の通知及び公表 (会議開催後)

- ・ 研究代表者に書面にて通知
- ・ 道路局ホームページ等において、研究状況報告書、研究概要と併せて公表

中間評価の視点及び基準(案)

■ 評価の視点

1年目の研究	
中間評価の視点	説 明
研究の進捗状況	研究の目的に沿って、研究期間内に目指す目標を効率的かつ計画通り達成するため、研究計画、実施方法、体制(研究遂行における研究代表者の主体性の確保を含め)が適切となっているか。
研究の見通し	研究の推進にあたり、研究期間内に目指す研究目標の設定、研究計画、実施方法、体制、共同研究者の役割分担が明確になっているか。

2年目の研究	
中間評価の視点	説 明
研究の進捗状況	研究の目的に沿って、研究期間内に目指す目標を計画通り達成するため、1年目の評価結果を踏まえ、研究は適切に進捗しているか。
研究成果の見通し	当初計画通りの研究成果が期待できるか(研究の進展により、独創的、画期的な研究成果が期待できるか)。また、研究成果の活用方策が明確になっているか。

■ 評価の基準

中間評価の視点ごとの評価を踏まえ、研究継続の妥当性について、次の基準で総合的に評価を行う(次頁参照)。なお、研究期間内に目指す目標が変更された場合は、その変更の趣旨を踏まえて評価を行う。

- 例えば、研究開始後に生じた新たな事実の発見や社会情勢の変化等により、採択時に目指した目標が変更された場合は、変更後の目標をもとに評価を実施。
- 一方、例えば、本人の責により、研究の進捗状況が思わしくなく採択時に目指した目標の達成をあきらめて目標が変更された場合は、採択時の目標をもとに評価を実施。

中間評価の視点及び基準(案)

評点	区 分	説 明
A	現行の とおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することにより、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成する見込みである。
B	現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C	研究計画を修正の上、 推進	このままでは、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成することが期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D	中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を達成することが困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

令和7年度中間評価 対象研究テーマ及び担当委員(ソフト分科会)(案)

No.	研究期間	委託研究テーマ(本格研究)	研究代表者	道路行政ニーズ	評価分科会	
					分科会	委員
①	R6-R8	自転車DX技術を活用したサイクルルート等の 整序化に向けた研究開発	文教大学 准教授 松本 修一	DX技術を用いた 自転車の交通安 全に資する技術 開発	ソフト	・ソフト分科会委員 ・道路局担当行政官 ・国総研担当研究官
②	R6-R8	平面交差点の安全性と円滑性を向上させる反 転交差点についての技術研究開発	横浜国立大学大学院 教授 田中 伸治	SE9		
③	R6-R8	観測データとシミュレーションの融合による自動 車OD 交通量パターン再現技術に関する研究 開発	早稲田大学 教授 佐々木 邦明	SE6 SDx2		
④	R7-R9	生活道路における工・心理・情報学の融合によ るデータ循環型交通安全対策の研究	埼玉大学 准教授 小嶋 文	SS2		
⑤	R7-R9	望ましい事業評価の指針策定にむけた研究開 発	神戸大学大学院 教授 小池 淳司	SA1 SA3		

令和7年度中間評価 対象研究テーマ及び担当委員(ハード分科会)(案)

No.	研究期間	委託研究テーマ(本格研究)	研究代表者	道路行政ニーズ	評価分科会	
					分科会	委員
①	R6-R8	制振ダンパーを有する橋梁における三次元ダンパー部材抵抗と橋全体系応答性状の把握	京都大学 教授 高橋 良和	橋の動的耐震設計法の高度化	ハード	・ハード分科会委員 ・道路局担当行政官 ・国総研担当研究官
②	R6-R8	非GNSS 環境下における高精度自己位置計測システムの技術研究開発	京都大学 特定研究員 西野 朋季	SDx7		
③	R7-R9	生成AIと深層学習を活用した斜面災害リスク評価および統合監視プラットフォームの開発	京都大学 教授 安原 英明	HDs21		
④	R7-R8	製作・施工の合理化に貢献する高力ボルト摩擦接合のFRP部材への実用化についての技術研究開発	東京都立大学 准教授 中村 一史	MH74		
⑤	R7-R9	自律型打音検査装置についての技術研究開発	東北大学 准教授 横田 有為	HM17		

【参考】令和7年度継続課題一覧(ソフト分科会)

No.	道路行政 ニーズ	研究 期間	研究課題名とその概要		研究代表者	中間評価結果
2023-1	SDx1 SE6 SDs8	R5-R7 (予定)	課題名	デジタルツインによる冬期道路交通マネジメントシステムの技術開発	北海道大学 大学院 准教授 高橋 翔	A (R6中間)
			概 要	冬期道路環境をエッジコンピュータにより低通信量かつリアルタイムに収集しつつ、AI を活用してデジタルツインを構築し、道路交通マネジメントに反映することにより、冬期の人やモノの移動にかかる負担軽減、効率化を実現する。		
2024-1	DX 技術を用いた自転車の交通安全に資する技術開発	R6-R8 (予定)	課題名	自転車 DX 技術を活用したサイクルルート等の整序化に向けた研究開発	文教大学 准教授 松本 修一	B (R6中間)
			概 要	DX 技術を自転車等に適用する事で、1. 自転車の快適な走行空間の創出に向けた情報支援施策、2. サイクルルートの効果的な維持管理に資する情報基盤の構築、3. 自転車の新たなヒヤリハットの類型化を行う。		
2024-2	SE9	R6-R8 (予定)	課題名	平面交差部の安全性と円滑性を向上させる反転交差点についての技術研究開発	横浜国立大学 教授 田中 伸治	B (R6中間)
			概 要	安全性と円滑性を向上させる新しい平面交差形式として反転交差点を提案し、その性能および効果を明らかにするとともに、導入の課題となる用地制約や社会的受容性についても評価を行い、実運用を見据えた導入指針を取りまとめる。		
2024-3	SE6 SDx2	R6-R8 (予定)	課題名	観測データとシミュレーションの融合による自動車 OD 交通量パターン再現技術に関する研究開発	早稲田大学 教授 佐々木 邦明	B (R6中間)
			概 要	本研究の目的は、ETC2.0 や携帯電話基地局情報、GPS に基づく移動体情報などを移動・活動シミュレーション上で統合的に扱い、道路の動的な OD 交通量推計やその近未来予測、さらには道路利用の転換効果についての定量的検討を可能とするプラットフォームを開発することである。そのために、データ同化可能な交通流シミュレータの開発、携帯電話ベースのOD推計、センサスODの動的補正等に具体的に取り組む。		
2025-1	SS2	R7-R9 (予定)	課題名	生活道路における工・心理・情報学の融合によるデータ循環型交通安全対策の研究	埼玉大学 准教授 小嶋 文	
			概 要	生活道路の法定速度 30km/h を見すえ、工・心理・情報の学際的観点から速度抑制にかかる心理的負担とデータ活用手法をデータ循環型で検討し、物理的デバイスの効果的設置方法と適用範囲拡大に向けた技術基準の提案、効果予測手法を提案する。		

【参考】令和7年度継続課題一覧(ソフト分科会)

2025-2	SA1 SA3	R7-R9 (予定)	課題名	望ましい事業評価の指針策定にむけた研究開発	神戸大学大学院 教授 小池 淳司	
			概 要	本研究は、諸外国の最新の事業評価動向を調査したうえで、事業評価における専門家判断の役割と実施内容を明確にし、社会的効率性と権利の両概念に基づく定量・定性的評価手法をとりまとめ、事業評価担当者向けの「事業評価指針（案）」を策定する。		

【参考】研究継続の妥当性評価＜中間評価＞

A：現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することにより、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成する見込みである。
B：現行のとおり推進（指摘事項有り）	研究は順調に実施されているものの、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C：研究計画を修正の上推進	このままでは、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成することが期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D：中 止	現在までの進捗状況に鑑み、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を達成することが困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

【参考】令和7年度継続課題一覧(ハード分科会)

No.	道路行政 ニーズ	研究 期間	研究課題名とその概要		研究代表者	中間評価結果
2023-2	HDs2 SDs7 SE6	R5-R7 (予定)	課題名	局地的大雨に対応した事前通行規制基準の『時間的』・『空間的』高度化	京都大学 教授 岸田 潔	B (R6中間)
			概 要	事前通行規制区間において、素因、誘因、崩壊事例により前処理した衛星解析から「潜在的危険斜面」の領域を可視化する技術を開発し、監視レベルを階層化する。「潜在的危険斜面」に対する浸透流・円弧滑り統合解析結果を学習した AI により規制判断を高度化する。		
2023-3	安価で施工性・長期耐久性・復旧性に優れる落石防護土堤の性能評価・補強・復旧に関する技術開発	R5-R7 (予定)	課題名	衝撃履歴を受ける落石防護土堤の残存耐力評価法と土を利活用した合理的な復旧・補強の技術研究開発	名古屋工業大学 大学院 教授 前田 健一	A (R6中間)
			概 要	堅牢でしなやかな環境調和型の道路斜面防災対策の実現に向けて、低コストで施工性・長期耐久性・復旧性に優れる落石防護土堤に着目し、落石捕捉後の残存耐力評価手法・土を利活用した補強技術・復旧時の技術選定方法に関する技術研究開発を行う。		
2024-4	橋の動的耐震設計法の高度化	R6-R8 (予定)	課題名	制振ダンパーを有する橋梁における三次元ダンパー部材抵抗と橋全体系応答性状の把握	京都大学 教授 高橋 良和	A (R6中間)
			概 要	実大・実速度による制振ダンパーの一方向・三方向加力実験と、制振ダンパーを有する上部構造模型の振動実験を実施して、質の高い抵抗・応答データを取得し、橋全体系の耐震設計法の高度化に直接資することができる抵抗・応答評価法を開発する。		
2024-5	SDx7	R6-R8 (予定)	課題名	非 GNSS 環境下における高精度自己位置計測システムの技術研究開発	京都大学 特定研究員 西野 朋季	B (R6中間)
			概 要	本研究では、画像と距離を同時に計測できる『センサフュージョンシステム』を応用し、GNSS が受信できないトンネル坑内でも、50km/h 走行する車両の自己位置を、トンネル延長に関わらず、誤差±5 cm 以内にて測位できる計測システムを開発する。		
2025-3	HDs21	R7-R9 (予定)	課題名	生成 AI と深層学習を活用した斜面災害リスク評価および統合監視プラットフォームの開発	京都大学 教授 安原 英明	
			概 要	本申請では、AI 技術を活用し、潜在的な災害危険個所の特定手法を確立する。また、多角的な実験を通じて地表面傾斜計の性能評価を実施し、実際の計測データから警戒レベル管理基準値を設定する。さらに、従来型 AI と生成 AI を駆使して斜面災害の予測、検知、対応の統合監視プラットフォームを開発する。		

【参考】令和7年度継続課題一覧(ハード分科会)

2025-4	MH74	R7-R8 (予定)	課題名	製作・施工の合理化に貢献する高力ボルト摩擦接合の FRP 部材への実用化についての技術研究開発	東京都立大学 准教授 中村 一史	
			概要	FRP 部材の高力ボルト摩擦接合では、FRP のクリープ変形により軸力が低下するため、高い摩擦力を確保でき、現場施工も容易となる高力ボルトを用いた接合方法を開発して、一般的な FRP 部材の接合方法として確立する。		
2025-5	HM17	R7-R9 (予定)	課題名	自律型打音検査装置についての技術研究開発	東北大学 准教授 横田 有為	
			概要	持続可能なインフラメンテナンス実現のため、高精度・高効率で安全にトンネル内壁の状態を把握する「自動打音検査」と「ロボット」が融合した自律型打音検査装置を開発する。大学の要素技術と企業の事業実績を基に、産学連携での装置開発・実証試験を行う。		

【参考】研究継続の妥当性評価＜中間評価＞

A：現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することにより、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成する見込みである。
B：現行のとおり推進（指摘事項有り）	研究は順調に実施されているものの、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C：研究計画を修正の上推進	このままでは、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を十分に達成することが期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D：中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究の目的に沿って研究期間内に目指す目標を達成することが困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。